

北区社会福祉協議会

東日本大震災チャリティ映画会

午後6時30分からの**追加上映**が決定しました！



山田火砂子監督作品

捨てるべき人間はいない――

チケットは、北社協窓口、各エコー広場館、
桐ヶ丘・滝野川東テイクホームで好評販売中！

大地の詩

うた

－ 留岡幸助物語 －

日本語字幕付き

©現代ぶろだくしょん

■上映日 10月13日(木) 午前11時～/午後2時半～/午後6時半～

■場 所 北とぴあつつじホール(北区王子 1-11-1)

チケット 午前、午後、夜間各 1,000 円(当日券 1,200 円)

主催: **北区社会福祉協議会**(岸町 1-6-17 ☎3906-2352) 後援: 北区

とめ おか こう すけ

「留岡幸助って何者？」

- ・ 1864年～1934年
- ・ 日本の社会福祉の先駆者で、感化院（現在の児童自立支援施設）教育の実践家。北海道家庭学校の創始者として知られる。

～ あらすじ～

岡山県高梁に生まれ、生まれてすぐに商家の養子になった幸助は、ある日、金持ちの武士の子に一方的に殴られ、耐えきれずに相手に嘔みつき打ち負かす。そのことで米屋を営む実家は得意先を失い、幸助は父から折檻を受け、学校を退学させられたあげく商人になることを強いられる。幸助は幼くして不平等な身分社会に憤りを感じる。

青年になると、幸助はキリスト教へ入信。同志社英学校（神学科）入学。24才で卒業後、丹波第一教会の牧師となる。多くの人に信頼される牧師として活躍した幸助だったが、明治24年、金森通倫牧師の勧めで、妻子を連れて北海道・空知にある監獄の教誨師に就任する。

その頃、空知集治監では、重罪犯二千人を収容し、中には、終身刑を3つも4つも持っている囚人もいた。強制労働など過酷な刑罰を受ける囚人達。幸助は、なんとか囚徒を更生させ、監獄を改革しようと、3年に

渡って囚徒の過去を調査する。

そして、犯罪の芽は幼少期に発することを知り、幼い頃の家庭教育の大切さに気づく。また、幼き日の友人が、犯罪者になっていたことも少年感化に従事する遠因となる。

幸助は教誨師を辞めると、米国に渡り2年をかけて欧米の監獄事情を学ぶ。そして帰国後、少年感化を実現すべく、北巢鴨の一角に「家庭学校」を作り、広く感化を要する子弟を教育、少年感化事業の先駆者となる。後に巢鴨の地が都会的になると、ルソーの『エミール』の中の「子供を育てるには大自然の中が一番」という説に感銘を受け、北海道・遠軽の地に家庭学校を作る。

映画「大地の詩—留岡幸助物語—」

製作・現代ぶろだくしょん

2011年/日本/116分/ビスタビジョン/カラー/DTSステレオ

留岡幸助語録

「学校に行ったからといって英雄豪傑ができるわけではありません。君子になるか、盗賊になるかは家庭の陶冶（とうや＝教育）によるのであります。それなのに今の家庭は下宿屋にすぎません。」

「教えんとするものは、自ら教えられなければならぬ。」

「教育上一番大切なのは家庭である。次に大切なのは学校と社会である。人の子を教育する最も適当な場所は、地球上どこか？ オックスフォードか、ハーバードか、エールか、ベルリンか？人間を良くする基本は家庭にある。」

「教養のある慈母が子どもの教育者としては一番。無教養なる慈母でもよい。」

「我が国の教育は情味がたらぬ、情味がたらぬということは、色々な悪結果を生む。学校さえやれば子どもは良くなると思っている親。学校が二分で、家庭が八分なのだ。」

「一生選んだ仕事を大切にし、人に愚かと言われても、時代遅れと罵られても、頓着なしに白髪になるまで一路白頭が、わたしの天職である。」

【製作】株式会社 現代ぶろだくしょん

【製作総指揮・監督】山田火砂子

【脚本】長坂秀佳、池田太郎、山田火砂子

【プロデューサー】井上真紀子、国枝秀美、藪原信子、萩原浩司

【音楽】石川鷹彦

【撮影監督】長田勇市

【製作年】2011年

【上映時間】116分

【キャスト】村上弘明、工藤夕貴、中条きよし、市川笑也、隆 大介、笛木優子、さとう宗幸、石倉三郎 他

【推薦】厚生労働省社会保障審議会推薦／日本PTA全国協議会特薦／年少者映画審議会推薦／東京都知事推奨／日本映画ペンクラブ推薦／カトリック中央協議会・広報推薦

【受賞】平成23年度児童福祉文化賞 特別部門(山田火砂子)

